

「正義の異邦人」——ユダヤ人差別に立ち向かった人々

要旨

現代社会には学歴差別や職業差別など、様々な理由で差別されている人々が存在する。こうした差別について考えるとき、世界で一番過酷な差別を受けた人々はいったい誰なのか、疑問が生ずる。そして、人類の差別の歴史を辿ってみると、それがユダヤ人であることは明らかであろう。

そこで本研究ではユダヤ人を救った人々に焦点を当てていく。その理由は2つあり、ひとつにはユダヤ人自身に関する先行研究が既に多数存在するためである。本研究は著者の過ごした大学4年間の集大成であり、できる限り既に存在する先行研究とは内容の被らないものにしたい。そのため、多数あるユダヤ関連の先行研究の中でもメインとして注目されることが少ないユダヤ人を救った人々に焦点を当てることで、独自性のある研究にしたいからである。もう一つの理由は、迫害当時の状況の中でなぜユダヤ人を救うという決断ができたのか、疑問が生ずるからである。ユダヤ人に限らず、迫害される人民を助けることは救助者側にも相応のリスクが伴う。特に、史上最も過激なユダヤ人迫害が行われた第2次世界大戦のさなかにユダヤ人を救出することは極めて大きなリスクを背負うことになったであろう。それにもかかわらず、助けを求めるユダヤ人に救いの手を差し伸べた人々が存在する。

本稿は迫害を受けたユダヤ人を救った人々が危険をかえりみずに行動した理由について、彼らは自身のコミュニティを優先したのではなく、人として取るべき行動を優先したという筆者の仮説の正否を確かめるものである。そのためにユダヤ人に対する理解を深めた上で、ユダヤ人を救った人々が行動を起こした理由を研究・分析していった。

結論として、筆者の仮説はおおむね正しかったと考えられる。彼らの行動は「苦しむユダヤ人を見捨てられなかった・困っている人を助けたかった」という人道的・博愛的な感情からくるものであった。これは一見すると簡単なことかもしれない。しかし、当時はユダヤ人に手を差し伸べるだけで即刻処刑される状況だった。処刑は救助者だけではなくその親族・関係者にまで及ぶ恐れがあった。そのような絶望的な状況の中でも、他人を思いやることのできる一握りの人々に深い尊敬の念を覚えずにはいられない。